

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：エヴァンゲリヲン 新劇場版 Q

その4

今回のテーマ

良い対象を見出し、交流し、現実に向き合うことⅡ

前回のおさらい

新劇場版 破 ではシンジと綾波が一体となる幻想的なシーンで終わった。しかしシンジの起こした行動は、それはシンジが綾波の喪失を受け入れられず、躁的な心性によって起こしたものだと考えられる。その幸福な世界は幻想であり、その中で排出された悲哀は必ずふたたび心に回帰して抑うつの苦しみとして体験される（幸せすぎていつか不幸が来るのではないかと怖くなるという発言もそれに当てはまるのかもしれない）。

エヴァではシンジが綾波と一体になる幻想を抱いた一方で、それによって起きたニアサードインパクトによって、周りの人々は苦しむことになる。またシン

ジ自身の心も、今回のエヴァ Q において、これまで排出してきた相次ぐ喪失（これは思春期の喪失の感情でもある）という心の痛み、悲哀が再び回帰し、現実直面し、苦悩し、もがきいていくことになる。

一般的に現実起きた苦悩や悲哀を受け入れていくには、自身の持つ愛の中にいかに収めていくかということが大切である。そのなかで徐々に「こころの痛み」を受け入れていく。

それにはシンジを取り巻く人々がシンジの思い（苦悩）を受け止めていく対象であり環境が必要不可欠である。

しかし暴走してしまったシンジはニアサードインパクトを起こし、周囲を非常に苦しめてしまった。それゆえシンジに対して彼を取り巻く人々は怯えと憎しみ、怒りの感情を抱いている。Q の冒頭部ではヴィレの人々は負の感情に満ちて誰もシンジに関わろうとしない様子が描かれている

そして死んだと思ったアスカに再会しシンジは喜んだのも束の間、アスカも強い怒りを感じており、ヴィレ内ではシンジの心をきちんと受け止める対象も

環境も内容に描かれている。

そのなかでシンジ自身は、周囲に対して強い迫害感を感じ、良い対象を求めて、綾波の声に従い、綾波が操縦する 0 号機にシンジが乗り込む。

飛び立った後にアスカが言った言葉が非常に印象的である。

アスカ「ふん、あれじゃあ、バカじゃなく……ガキね」

これはシンジがシンジ・綾波の二者関係への退行してしまったことに対する発言と共に 3 者から関係からアスカが弾き出されたことへの妬みでもある様に感じられる。

3. NERV に戻ったシンジはどうなったのか？

1) NERV でのシンジの生活はどんなことを象徴しているのか？

NERV 本部に戻ったシンジだが、そこはボロボロで朽ちた状態で（この世界そのものが彼の心性の象徴 cf：序の綾波の部屋）、与えられたシンジの部屋は、何もない、ただっ広い、シンジ側からはかけられない電話が置いてある殺風景な部屋で、シンジは味気ないペースト状の食べ物（離乳食を彷彿とさせる：口唇期→肛門期か？）を日々の食事をしている。

→以前の序の冒頭部の頃のように、心は傷だらけだけれども、誰からも保護されず、傷がむき出しのままで、シンジは傷つかないように、殻に閉じこもり、受身的で感情のないシンジに戻ってしまったこと象徴しているように感じられる。

それでもシンジはどうにかしたい思いもあり、綾波に会うが全く会話が噛み合わず、以前のように綾波はシンジの思いを受け止め、返答する感じはない。ここでの綾波はシンジの心を受け止める（コンテインする）器になっておらず、綾波が全く空っぽの様な存在になっている。

そこがシンジが言った「ここは部屋にもなってないよ……。」という言葉が象徴的である。

この言葉は、今の綾波は自分を受けめてくれる存在になっていないよ、というこ

とを表明している言葉の様に感じられる。

つまりこの二人の会話を経て、シンジは自分を守ってくれる対象はいないと強い喪失を感じたのではないだろうか？

その後…自室に戻ったシンジは音楽プレイヤーをいじるが、

「ダメだ。動かないや……」

音楽プレイヤー色々動かそうとしても、壊れて動かなくなっている。

→音楽プレイヤーに関してシンジは破で「耳を塞ぐと心も塞がるんだ。嫌な世界と触れ合わなくてすむからね」と言っている。

→音楽プレイヤーが殻にこもる役割と共に外界（現実世界）から守る役割を果たしていたが、それが機能しなくなった。つまり自分を守ってくれる良い対象がなくなってしまったことの象徴の様に感じられる。

そしてシンジは横になると今まで言われたこと何度も思い出される。

「何もしないで」とミサトが言う。

「あんたには関係ない」とアスカが見下ろす。

「エヴァにだけは乗らんでくださいよ」とサクラが叫ぶ。

「エヴァに乗れ」とゲンドウが言う。

「知らない」とレイが言う。

自分を守る、良い対象のなくなったシンジは周囲の言葉を全て被害的に捉え、その言葉に混乱し、苦悩しているように感じられる。

4. 渚カヲルとの関わりはシンジにどのような影響を与えたのか？

この Q では、今まで親しい存在だと思っていた葛城ミサトやアスカが、迫害対象になり、綾波も自分を守ってくれる良い対象にならなくなっていると感じているシンジは、支えを失い、孤独を感じていたと感じられる。そのなか、渚が彼をピアノの連弾に誘い出す。

カヲルが弾くピアノにぎこちない感じで入っていたシンジだが、徐々に水を得た魚のようにイキイキとして二人の演奏が一つになっていく。

二人は連弾をしながら会話を交わしている。それは Q では見られなかった会話らしい会話をしている。それは対等な立場で情緒的に交流していることを意味する。

この会話の中でカヲルは「音が楽しい。二人ってすごいね」と言っているが、このピアノの連弾を通じて、カヲルはシンジに殻を破り、外界で人と深く情緒的に関わること（それがアンサンブルだと考える）が非常にイキイキとした彩りを持つものなのだということを身をもってシンジに体験させている。

そしてシンジが「うまく弾く」コツを尋ねたときにカヲルは「気持ちのいい音をだせばいい」と言っている。そこでは、なにか周囲に対してうまく振る舞う必要はないと言っており、そのことに加えて、自分自身が心地の良いと感じられることに目を向けていくことの大切さを伝えている。一方でカヲルは「反復練習」の重要性を説いている。楽器の演奏でもスポーツでも反復練習と非常に重要 (cf.

Deliberate Training、1 万時間の法則）だが、自分のこれだと思えるものにとことん追求していく、ひいてはそのことが自身に磨きがかかることにも繋がっていると言っているように感じられる。

カフルは連弾で関わることに喜びを一緒に考えながら、他者とより深い喜びを得られるには何が大切か？ということを伝えている様にも感じられる。

参考

デリバレート・トレーニング (Deliberate Training) とは、目標を明確に設定し、集中力と意図を持って取り組むことで、効率的にスキルを向上させる練習方法です。従来の「反復練習」とは異なり、単に動作を繰り返すだけでなく、フィードバックや課題設定、目標達成に向けた明確な計画などを取り入れることで、より効果的な学習を実現する。

連弾の後に自室に戻ったシンジはじっと壊れた音楽プレイヤーを凝視し、その後、カフルに音楽プレイヤーを渡して直してもらうことにした。それはシンジに

とっての良い対象が綾波からカヲルに変わったということをこのシーンで示している様に感じられる。

3) シンジが現実を知ること。

～妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行することの辛さ～

カヲルと関わる中でシンジは現実世界を知ろうという思いが強くなり、鈴原トウジ書かれたタグのついたシャツを着て、シンジは自身が長い間現実から隔絶されていたことを痛感し、怖くなり、現実に向き合おうとする覚悟を決めたと考えられる。

シンジ「うわっ！」

断崖絶壁の階段は、一步踏み間違えれば命の保証はないほどの高さにある。下から吹き上げる強風と濃い霧が、足下の悪さに追い打ちを掛ける。シンジは壁伝いの鎖にしがみついて下りようとするが、思うように前へ進めない。辺りは有害な空気が充満しているため、シンジは防護服に体を包んでいる。いつもよりかさ

ばる恰好が、更に歩き辛さを増している。一方、カヲルはいつも通りの制服姿のまま、まるで恐怖感のない様子で階段を降りて行った。カオルの姿は、みるみるうちにシンジとの距離は開いていき、霧でかすれて薄く、小さくなっていった。

シンジ「渚君！渚君！！」

カヲル「さあ、もう少しだ」

カヲル「もうすぐ雲が切れる。君の見たい真実が見えるよ」

間もなく、厚い雲に覆われた空がゆっくりと幕を開けた。

シンジ「……なんだこれ……」

想像を絶する光景。赤く染まった大地。そこから伸びた巨大な十字架。その十字架は雲を突き抜けるほど高い。雲の絨毯の遥か彼方には、血で染まった星が浮かんでいる。その星は視界の半分を覆うほどに近い。

カヲル「君が初号機と同化している間に起こったサードインパクトの結果だよ」

シンジ「これじゃあ、街のみんなは」

カヲル「この星での大量絶滅は珍しいことじゃない。むしろ進化を促す面もある。生命とは本来、世界に合わせて自らを変えていく存在だからね。しかし、リリンは自らではなく、世界の方を変えていく。だから、自らを人工的に進化させ

るための儀式を起こした。古の生命体を贅とし、生命の実を与えた新たな生命体を作り出すためにね。全てが太古よりプログラムされていた絶滅行動だ。ネルフでは人類補完計画と呼んでいたよ」

シンジ「ネルフが、これを……父さんは何をやっているんだ」

カヲル「碇シンジ君。一度覚醒し、ガフの扉を開いたエヴァ初号機は、サードインパクトのトリガーとなってしまった。リリンの言うニアサードインパクト。全てのきっかけは君なんだよ」

シンジ「……違う……僕はただ、綾波を助けたかっただけだ……」

カヲル「そうだね。しかしそれが原因で……」

シンジ「そんな……僕は知らないよ！そんなこと急に言われたってどうしようもないよ！！」

カヲル「そう。どうしようもない君の過去。君が知りたかった真実だ。結果として、リリンは君に罪の代償を与えた。それが、その首のものじゃないのかい？」

シンジ「罪だなんて……何もしてないよ！僕は関係ないよ！！」

シンジは頭を抱えて苦悩する

カヲル「君になくても他人からはあるのさ。ただ、償えない罪はない。希望は残

っているよ。どんな時にもね」

【考察】

カヲルとの交流の中で自己愛的な殻を破り、現実に向き合おうとし、カヲルに懇願し、街の様子を見に行ったが、そこに広がる想像を絶する光景。赤く染まった大地。そこから伸びた巨大な十字架。そして破壊され尽くした光景にシンジは言葉を失ってしまう。そして自己愛的殻に閉じこもり、妄想分裂ポジションの心のシンジは自分の問題とは捉えず、父がこの様にしたと考える。

そこにカヲルは静かにシンジ自身がこのニアサードインパクトを引き起こしたことを伝え、シンジは非常に混乱する。シンジにとってこの惨状は取り返しのつかぬ程に破壊されつくされており、自身がこんなことをしてしまったという現実を受け入れることは耐え難いものであると考えられる。それであるが故にシンジはカヲルの伝える真実を必死に「僕は関係ないよ！！」と言い否認し続ける。

現実を受け入れるということは、これまで外部に投影していた攻撃性や破壊性が自分自身が行ってしまったのだと気づき、自分に責任があるのだと認め、

受け入れる心の作業であり、まさにそれが抑うつポジションの心性である。しかしあまりの惨状にシンジは自分がしたことを受け止めきれず、抑うつポジションに移行しようとしていた心性が再び妄想分裂ポジションの心性に移行し、全てを否認し、自己愛的殻に再び閉じこもろうとしている。

ここでカヲルが最後にいう「償えない罪はない。希望は残っているよ。」という言葉は非常に重く響く。そしてこの言葉はカヲルが「破」の最後に言った「今度こそ君だけは、幸せにしてみせるよ」という言葉に呼応している様にも感じられる。

幸せについて、それを日々のありふれた生活の中でイキイキと彩りを感じさせることととらえるならば、シンジを幸せにさせるということはシンジが形成している自己愛的殻を破らせ、さまざまな喪失を受け入れ、現実世界（外的世界）に向き合い、妄想分裂ポジションから抑うつポジションに移行させることであると考えられる。シンジにそう仕向けていこうとカヲルは考えていたのではないだろうか？

→その後冬月からシンジの母ユイ、そして綾波の真実を伝えられ、その後綾波に会うが、綾波は助けていなかったことを知る。

シンジ「なんで本、読まないんだよ……」

綾波「命令にないから」とレイは答えた。

シンジ「命令か……じゃあもういいよ！！」

シンジは積み上げてあった本を押し倒した。

シンジ「ねえ、綾波だよね？」

綾波「そう、アヤナミレイ」とレイは答えた。

シンジ「だったら、あの時助けたよね？」

綾波「……知らない」

シンジ「くっ……うう」

綾波「碇君？」

レイは、何も言わずに立ち去って行くシンジをぼんやり見て立ち尽くしている。

シンジ「助けてなかったんだ……綾波……」

シンジはどん底まで突き落とされ、シンジの脳裏にはこれまで直接父やミサト
そして周囲の人々に言われてきた迫害的な言葉がリフレインし、苦しみもがく。

「何してたんだ僕は……」

部屋の中で音楽を聴いていたシンジは、自分の無力さに耐えきれず音楽プレイヤーを放り投げ、

「うわあああ！！」と大声をあげてしまう。

あまりの迫害感にシンジは取り乱してしまうが、自分ではどうしようもできず、
自分をまもってくれる音楽プレイヤーも自分の心を守るには機能せず、苦しみ
ながら孤独に必死に耐えていた。